俳家奇人談

上

へ 5
2766
1

門 ヘ伊5
號 2766
巻 8

天保壬辰秋鐫

蓬廬青々山人著
八朶園寥松老人補校

俳家奇人談

東京書肆
萬笈閣梓

明治四十三年四月二十七日
藤野潔氏寄贈

俳家奇人談序

藤野潔氏遺愛之記

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比之彼詩與諺諺者俗而叶音詩者雅而有韻固其自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人情固同之若其詠之人意有雅俗而其發言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者俳句與諺固俗而發有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也竹内勾當玄玄一者所
謂目雖盲不盲于心而居常好俳句其詠
四時景象言人事喜戚閒適之趣淡薄之
味往往使人有無限可感者不為不多矣
纂而輯之名曰詠物句選云玄玄一嘗曰
古人之言俳句者不少而欲尚友其人則
不可不知其意匠事蹟也於是乎廼撰有
其美名佳句而事之可以賞者而遂成編

刻俳家奇人談序

曩小閑田子近世畸人伐集録し載て世出に詳か
なる里来者何めといへども復て此盛を継ぐものなし
竊ひ惟みるに永正天文の比小守武宗鑑此清探
あ利寛永正保若中に貞徳季吟の卓犖あり延
宝元禄の間小宗因桃青此逸群何り且至一為哉
貞宝立圃重頼伝徳言水其角嵐雪去来文竹支考
許六北枝惟然来山鬼貫乙由不角原松淡淡等此一家
あ門く世習小雑出する間ハ俳家まも亦その人なしと

いふ所ならば茲に先人玄玄一選稿あり里俳奇哉好む者の為に輯すなり八十有餘談楚は要しとるや古人は行物哉擧て書るを知しぬ又各句に雲風韻の変を識すに何り今也叨里に題し至之を俳家奇人談といふ後来君程容幸に漆桶摸索は罪哉喝ずんは僕が寝躍何るすか是ゝ志加んや于旨文化丙子若歳初春蓬屋に筆を採す

儀洋閑人青青

名之曰俳家奇人談其子再校而刻之以継其父之志豈不懿哉苟世之言俳句者讀之辨今古之文質知意趣之雅俗則有復裨益于風教亦以為不少矣古人有言云誦其詩讀其書不知其人而可乎是以論其世是尚友也玄玄一其有感于此者也乎是為序

文化乙亥秋九月既望

江都　臥舫散人譔

よりも俳とふ名をもとに世の事をとらへ見おきてと
西上人のよみのこされしハいとまもしらしかに世
世にあるにしたしきハ何そに世とかの名をハとも
世とよもすれとそおもひきて侍るにしてわかる友に華に青こ
なはものを又俳にせし時弱おほゝ如くなりとて
年比匣にかくしもてるを又明よりこのこれ俳家
にまくの事譚を筆して其家也はかりに書しるなり
其時あとくく蔵をきよりしてよしなしにまた

可ふ事なし　さるに此所士の葬ノ地ニ立ちるんな
おもの　あさたりし事と一喩をのこせるまんとの
葬のも諸葬にちまひて　葬に出れぬ我ものを
清しせし手の引しんそれ　おもしのさいしかしねハこそ
小さめ　おくの字とし出るに　すこせの　家子　朽すして
後の名をとはなとそ　なのに　出るなり

八乃木園　案松

凡例

一本文引用する所は出ハ謂ゆる諸俳家集紀度雑記書類
頗く数百部一云半句といへども定変何家時ハ求め
従ひいふ事なし又僧吟の正記を知人に陪て此を詳に
一雲載在する者を上文照より下あ永に斜ニ古今俳
談八十餘家各自の家行風韻我志らしむ
一此出唯筆に随く年代は次序に拘ハらず且その僧書
委曲京流ハ家く此世記にゆづ里く茲に畧に素より
風流を当ゑ已来れバ本ゆ
一文学性徒来山捨女千代は属を此閑田が紀する所と頗家
呉家の徒迷ども雲家の我審て見んと難せば必らず
雲出と互考すべし

一旧才に募て得る変君古画濱短尺出懐等並びて友人
紹真の筆を借添も亦禁れ旨意を解するの一助奈添
臣しや観る人それ諸我恩へ

蓬廬青青識

俳家奇人談目次

上之巻

一宗祇法師　一荒木田守武
一山崎宗鑑　一松永貞徳
一杉田重一附　英洋女　一野々口立圃附　鷺水
一松江重頼附　春澄　一高瀬梅盛
一山本西武　一鶏冠井令徳
一安原貞室附　元次　一北村季吟附　湖春
一齋藤徳元　一石田未得附　未琢

一 高鳴玄札 附 山夕
一 半井卜養 附 慶友
一 芳賀一晶
一 神壁忠知
一 池西言水
一 井原西崔
一 田中常矩 附 常長
一 菅谷高政
一 上島鬼貫
一 荒木加友
一 池田正式
一 中島貞宜 附 二葉
一 田氏捨子 附 盤桂禪師
一 西山宗因
一 椎本才麿 附 團水
一 田代松意 附 正友
一 伴茂信德
一 園女 附 惟中

一 小西来山 附 由平

中之卷

一 松尾桃青
一 服部嵐雪 附 烈女
一 僧文草
一 東華坊
一 惟然坊
一 秋之坊 附 李東
一 僧浪化
一 榎本其角
一 向井玄来
一 森川許六
一 曲翠 附 破鏡
一 勾空
一 磨工北枝
一 僧千那

一小川破笠　一路通
一梢風尼　一智月尼附　乙州
一鯉屋杉風　一壁坡
一越智越人　一涼菴
一曾良　一原田宇古
一知足一家　一生駒萬子
一山口素堂

下之卷

一中川乙由　一舍羅
一霧川坊　一高聖百里附　琴風
一淙川湖十　一秋色
一紀文親子　一櫻井吏登
一水間沾徳　一葉罌沾涼附　行尚
一大淀三千風　一立羽不角附　辰角
一大高子葉　一加藤原松
一松木淡淡　一桑罌貞佐
一活井旧室　一梅路
一孑聖尼人　一蝸内仙雀

一千代女　一山口羅人
一横井也有　一清水超波
一建部涼袋　一遊女洛
通計目次八十有六法
一玄玄居士略傳　附　今世名家追福製句

俳家奇人談巻之上

行窓玄玄一遺稿　男　蓮座書書　参行

宗祇法師

宗祇法沙松年若比京里しが あ家ひと年 陸く連歌の
むと我問ましに惜いう家業十年闇より 連奇ハ廿年ハ
功を積げれば雲妙に到里雖しと答ふ嗄いはく我らハ十年
昼夜勤ずば如何と或人大ゝ何れ来く我が及ぶ所にあらず
ずと感せしとりや漢ハ相如ハ四十にして始く孝經を讀
唐の高適ハ六十にして神て詩我作家ければ此嗄が連奇
達をしも亦宜ならずや故に伊丹の鬼貫も是を称しく
尚時豊双なりと記せ里或時近隣に雖産阿里なる仮ちその
屋に隠ぐ一摩河般若はらみ女の奇特ゝ家宗祇一二も流て

さんの紐とくと宗長は綴しけるが乍ち男子をお生せり又
時君　帝の瘧疾頻はせ玉つるに此叟の連奇して法全快
玉ひしゆゑ何れ重妙境に入と紀は重家時を後と少なからぬ
重號を種玉房旬秋といふ何来の年にか有けむ仲秋三
五は夜一天深雲かゝ里月の宴を家ふげる我歎く一云とゝせの
月を曇らぬ今夜かなし句古今無比よく人の誦する所なり
又連臨して一世に奴るは交に時夏の宿う京是二條院濱波の古
奇に倚し吟なり後に蕉翁宴に感慨して一世は中は交に
宗祇の宿りなとを暮れとり所に枝風を沙君詠は彼法沙
我宗とゝく重一生は豊為な詠だし　と謹傳ふ文龜二年
七月お所湯本は客舎に寂す業八十有二世を辞す詠の奇
はかなしや鶴の林の煙にも立をくれぬる身おそ昭むまた

荒木田守武

荒木田守武は伊勢内宮の神官なり和歌連奇我好ぐ一時
に名あ里或日連奇興行君席に臨しに皆法師の人くなれば
一法座愛を見まだ何れをかみなほ宗祇傍りし在く一云とも
霎は奴里鳶帽子着てと附られしは殊に興阿里てぞ見えける
嘗く童子教誡は為に一夜百首を詠ず一首ごとに世中君
二字我押に是我世中百首といふ又國人等重して伊勢論語
とも称せり且俳諧は鼻祖なり里一元日や神代のまも思ひ
一撰子や隻野君原の落し種を此調高尚人の及げる所なり
獨吟千句をなほ雲巻頭に一飛梅や種ぐ愛を神はたる今
を此篇我讀に不易の什多し宜味之後来金一園め等ぬ
名家を出すも此人我所く勢陽は拵梁とは志に等むだし

守武霊像者摹往時所崇於
度會外宮之真而其門
葉之所傳也先乾什
素出其派嘗師余
難點止附與沾洲
沾洲授之雪齋
後莫知其所在后乾什
素求而得之云爲其古物可知也今取
以圖焉　蓬廬青青

世に「蔵茲我南堂阿弥陀仏とゆふへ哉（江戸龜屋源左衛門持寺武旬筆の短尺に美撰山にて）
いふ雪出して其句我辞世なりと称ものハ紙なるを晋子院にし
無せり天文十八年八月卒に辞世の歌「越ひとも又行末も
神祇山峯に雲風峯の松風殺句「我都に今日を見ゆらん
我世加奈

山濤宗鑑

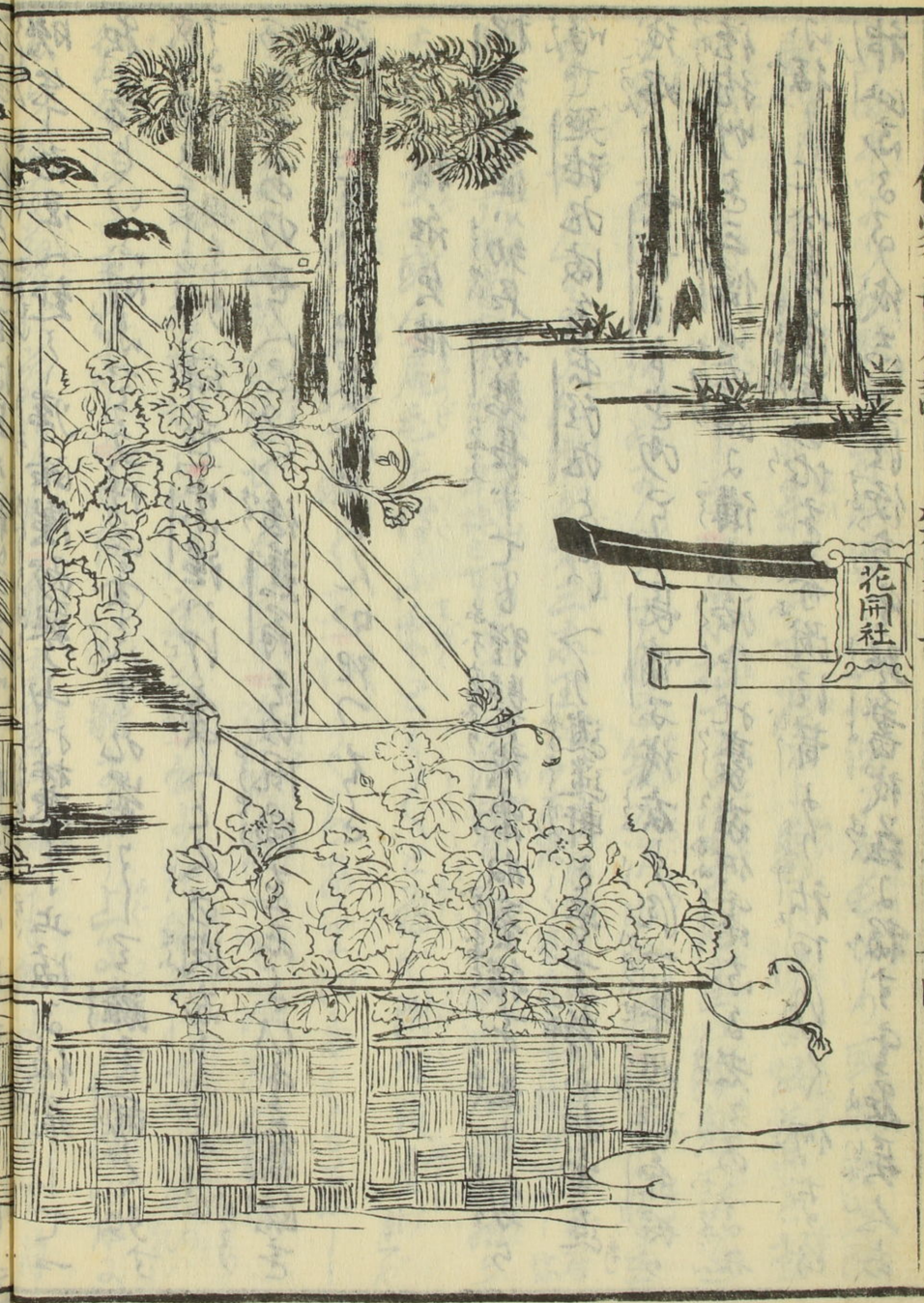
山濤宗鑑ハ近江野君人本姓支那氏ましく代々足利家の
臣なり長享元年佐々本高粉上洛さに大樹義尚こゝ
から兵を帥く追討し勝利を得る同く二年宗功によりて
同大臣に任ぜられ義熙と改む延徳元年義熙松峯ならず
して遂に薨に時に支那氏廿五峯主従の別我悲みを
致仕して利数し掃物厄り濤に住し後嫌州山濤に竹林に

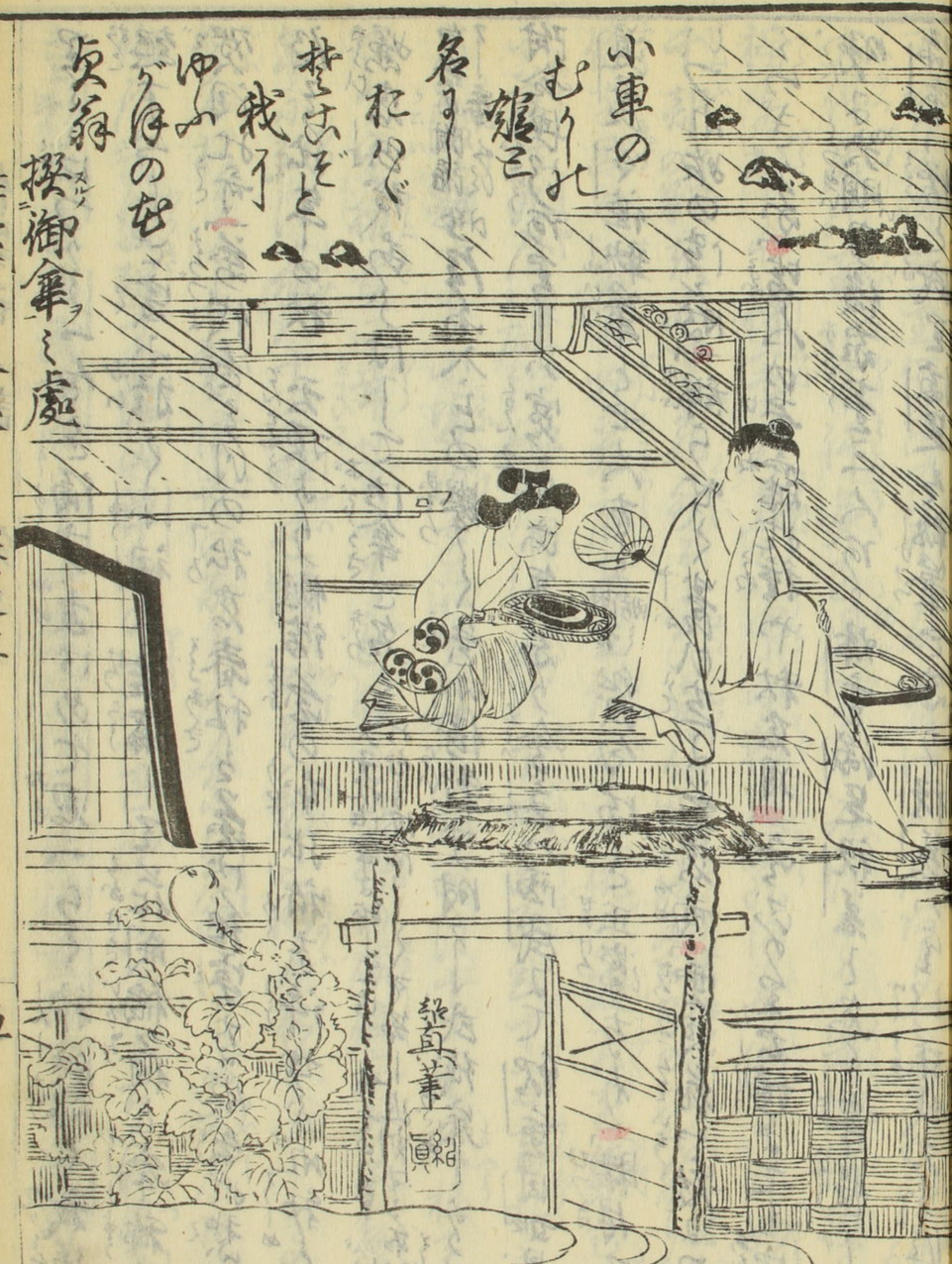
遁流素より和歌連奇に達し又俳諧にも長ぜり或時遁遥院
殿に寒隆へ宗長諸とも糸流とて光て雪しける烟葉を折
て赫里ひるに口に流しを「手に持てる姿を見ませば鎌鬼つぶると
と異じ玉ひける哉」「ぬまんとすれど髪の沢水宗長「蛇ゆ遁ませ
字何地かへるぶん鎧が弟三家里案ずるに雑法集俳諧句解宋国耕筆等みな誤く寒隆公を龍山公とし宗
長の招を遥とたれば近来越谷吾山よのる哉叮嚀す滑稽古平記を準拠とせり「ければ滑稽句在まれ生性の拙ら
志むる変り或人「尾毛を傳ふ雲とくくと為て附句哉重け
「水鳥の尾羽に寄けさ解く又「切とくこもあ里切角くも来し
といへるに三句而重せられく「盗哉彦へて見ませば我子
「けたかなる月哉加く世流芸の枝「公よ紀的矢に少し長い
髪句流と古雅なり「手哉ついて歌まうしよる嫌ゆ「撰小本に
志ら流な蓼に花けりり「傘を若ば雨にも右よ夜半花屋

晩年弱玉へ起く帰路潢州琴山に林麓ゆ止流る仮居して一
枕房といふ時に三文廿二年八十九業にして癰を病ぐ死す
或は寛文二年の歌とする云の小松撰京也辞世「宗鎧は伊愛へと人の問ならばちと
何里てあり世へといへ後蕉翁その風流を志さひ雪舊跡を
尋ぐ「有がと紀姿わがまんか紀つぶと

松永貞徳

松永貞徳は幼名勝熊長じても猩髪哉米ね童服を著し旬ら
味で延陀丸流多長頭丸ともいへり遁遥軒と号す是に和奇連
哉好ぐ玄旨法市を沙とし長嘯子哉友とは一年蝶翁菜好が
徳孫竹を三條の大路に講す洛中に豪家何業なる者その高無
に振して今花芸器の地を寄附に昔より社何ゆく何ぞ流
神此なるる哉志らば便ち雪琴書哉茲に移す雪花呉人あ


花開社


小車のむりれ
雛ニ
名まし
れいぐ
楚さぞと
我了
ゆふ
が浮の世
貞蘇
撰御傘ヲ處
紹眞筆

里ゝく口つかふ一句を誦す爰はめて思へらく神祉に於く我道を
起すべしと宴に招く小祠を結構して花開稲荷と奉称す
賀詞に奇一蒙代を三月の祇園春秋は蒙は紀宴なれ云に禁蒙
は三代年の秋　天頂より俳諧蒙の本孔称を評せられ神く去
嫌蒙出我あらはして法傘と名く天子に法傘に比して法一合ふるなれば
此也も風流しく可第一進刻する所流揚
句撰の附諧
了季ゝ此に入るの擧く是に侍粉す時ゝ式我定しより始く
附合興行何里しは寛ゝ那六年なり今主は西武にて釈重因如目能
道蒙令徳執筆と七人なり附合略く發句滿と正潔なり一睦月ゝ
いづれ始の法ゝ時一辭らせく蒙ひ立よ蒙蒙雨一雲月花一度に見
うつぎかふ皆人の蒙麻に種や秋蒙月一冬ざの里去塿までも穴
晩に失明の後衆童三人なり孫重滿足祝蒙と名く年長じて
孫重は僧と成里滿足は執筆と成り祝蒙は重行末我去ゝ又

可第の説なり里何迷の年にも有けん故なりて堯徳釈主より
大佛殿に南北才許多を陽里くみ月かふ果樹我捧名
榜をおして梯壹と名く中に報恩蒙なり網るに妙經
千部子昇の筆我に以す蒙かゝ六奇仙上官右子達磨大沙人此聖ゝ此
紫式部定家等の六人なり
像を画く前に吟蒙廟あ里詩奇蓮俳蒙短尺を集む直
に芦に丸屋蓑笛を以て囲に通ば方域東西武十万南北三十
百藏籬するに皆竹を以て今圖あ月字を撞根を存
せめ重權貴に幸せらるゝ也此篇の碩徳なり承應二
年に歿に壽八十三辞世三景の中一昭日は彩と昨日なりしるべし
今日なりくも整塚世のあらいか東貞篇はじめ大志なりて
俳諧我製起す羅山草山の家子を以くつ人と有に且立甫
重粒貞室西武梅國令徳季吟徳元末得玄札一雪安靜宗

畔原茂松堅定重等みな家匠なり嗚呼盛なる家

松田重一　附　美津め

松田勾當重一は勢陽神路山に林麓に居せり生性十二律の調子を聴く掬の善悪を占ふ術を得たりといふ我朝の沙曠とも称しつゝ住し懐抱に守武が俳風を慕ひ道を謹ずる在ほが如し老後性にし貞徳の流削をも交しとぞ生句茂雅に咲えたるは「咲茂の兄は兄和どの亀香なり」「禁れこ起く空再色が奈松鶴」「松ばづから鶯籠や園の飛思はばりき此時にして是妙何ぞんとは寛く水七年六月八十三歳にして死あり

つゝ美津めは同玉山田松本光貞が妻にして俳諧忠妙手なり「嗚にけえ茶はじ何に松字」「右記ぞより志れぬ蕨に手先なるを此つより松坂の達めを出きり

野口立圃　附　鷺水

野口立圃初名秋重俗姓雛屋市兵衛の名を此常居烏丸家に光廣の法館に近く平生お入して略和奇茂原にも多つさは此里にて茂等物秋玉より出法を傳ハ里物雅探幽より画別を得たり古いかいは己が長ずる所貞つ言兄の弟子なり「八雪に降を家似せを茂茂氣」「行水や汗を惨も夕稜」「山嫗と絵にハ名にや立田姫」「庭に此人さぞ家落葉は東山此人嘘草を亜相の法跋に此義の天窓に蓼摺少木をさらふなど興しまひしは生性の偏屋なるを述しもをかし追別の出に洋かなる撰して後世の軌則と云ふ蕉籍もふかく是を称せらる死する時歳七十一発文九年九月なり辞世「月茂の三句同を今志る世なり

書本鷺水は立甫門にして名樹墨と号ほ「玄来る年の歩みや魚千里」「室咲の組織は習ひを窓に樹」「今日に月霧も高て

後川稲禁ゟ家「折ゞりり聖源姿や千葉遂に沙宮を継ぐ
俳諧形式を著ハ江享保十八年に死す

松江重頼　附　去滝

松江重頼俗名大文字屋治右衛門俗名維舟といふ貞義に遂を傳
習江戸風様まゝ立圃と俗仲すべし「彼岸とて慈悲に打する
茶毛ゟ家「妖礼の棒バカ里ゆく夏肥ゟ家「秋やけさ一足に知源
拭い様「料理河里殘に冬ゟし拾毛なし此子生得浚窓して
同ツと交を絶むと数多ゟ家ゟ寛永の頃ゟとよ太子集を撰す
源時立甫「黄火を河若せなゟ此冬ゟ家といへる句我加入きん
我粮む粮沙の句「黄火を野中のむしの冬ゟ家と同源なれバと交ゟハ江甫此るゟ我
沙に沿ふ沙毛句源より後ハ見るよし進られけれども遂ゝ
許容せバ笠に依ゝ沙弟此初み姑く絶より粮返く此を昭を

他日甫我害せんと計る沙義むれを咲く強才なく甫をも動
尚せり又毛吹艸我作れる時親山の正式とも矛楯ハ和よぶる
あ里正式説に沿ふ又貞室亡母の追悼に「禁を茶此墨く覚れ佛の座と
いふ句我見せりる日に粮むまを識れるより不快とハ感ずり粮
室が裏の俗を「移散を日まけ我為ちやはなをしげとハ口ぶ
けんみりる室此を咲く「送火を活身此為の大文字とハ申ふる
此句前表と感しまや此子習毛なく身ほりぬ延宝八年七
十四歳ゟ家ゟ

書本去滝ハ初め重頼の門にして後貞恕此弟子とも家ゟ或ハいふ
粮の門徒にし重栄重才重好重貞阿り是我江重といふ生長
滝その列に入んる我敬江粮ゆるけず滝むれを志ゆ故にし破
つして貞恕に属ありと「奈良法沙若葉つむまや西小袖「悲めや

巨燵まて手れ出ゆるまて正徳五年に死ほ

言瀬梅盛

言瀬梅盛は京洛に居して陀心子と号ほ「東より西は相出ゆる
相初日かな」「菊巣や蒔も喝ふも慾れる」「行人の臣艸とゐる也
雅かなに「菊生其形多なれや色ちらげ又奇臣に達する此吹え
何里く巣東人　召る齢も臣ゆ傾れぬと固辞して故人の季
吟を進ゆり吟嘆の　客家人　出らるは是お此老が先客なり
元禄十二年四月八十九巣にして死ほ

山本西武

山本氏は神免京都に住して綿を高ふ後に入臣して西武
といふ世が秋まで風が彩とも号ほ「大上戸ぶがしに在りにしざ
りな」「見ぐくらならぶや文殊姫けんぞう」「かふくに身は咸
果て何とせみ」「芋も子我生ば三五れ月夜かな」「金持の嘆さうに
貧苦子かな此人巻巣より此家の執筆なり故に秘決意く
習ひ得たり此も毎巣三物を組ぐ他に評さぐ唯我と正章と
西武とはみ言ふ我は江の人となほ時々此家病床に於く
此子に俳臣の武を譲る出にいはく
俳諧批点の後聖ゆ人別ち評免中は批点は次人丸象像
一幅巻中は含其時に掛可強は遺物に残垂中は短冊

宝和月鈔白

長頭丸判

西武後人

言つ人多相中に新添切に変戒せらるゝは臣の冥加に叶ひし
事なりと時人中合里とぞ此死してより鷹筑波を編して
初心我導相樞といふ出を著して俳の扉我立つ何の年にや

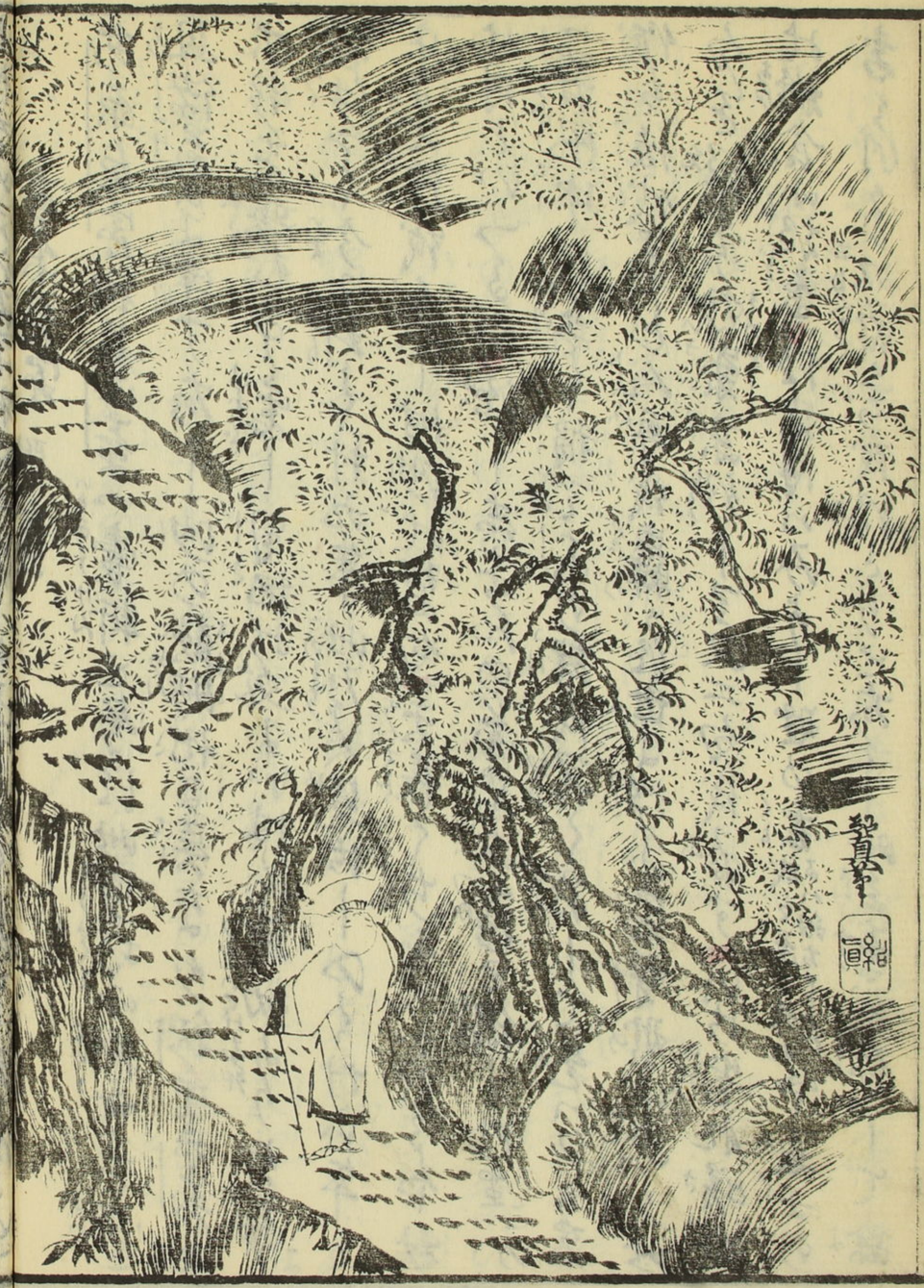
有け堂七十三歳にして死せり辞世「我の明くも落て
云ふくや淨去つ

鶏冠井令徳

鶏冠井良徳は京沙君人池隣房と号は後に尚今　天子
人主百十二代　此清諱を避く令徳と改む「住此江の波此鞍や松
此諱は良仁
囃子「稲妻のおもかげ見てや夜這星「袖塀君縫り朽葉の
蔦かつら「言合羽雪打拂ふ袖もなし　或時伊勢君守
武に俳く獨吟手句我為は沙蘇も深く生を感ぜらる
延宝七年九十一此壽を終る鶴波集に良親と有
て「厳手は何たゝ我するか山此に良忠と阿川を「多でさい
此三禁やふえ流今日の去と良徳が後に記すは忍くも
生一つなる屋し

あ原貞室　附　元次

あ原貞室初名正章一嚢軒と号は此叟巧に俳奇を深
且諸藝に達す故に沙の顧眄他に異なり親重重我等
出れを嫉むる雪し旬記此文にいはく我幼より貞蘇に
馴仕て今に斜く廿九年此屋人見出しのく廿六年と
生免許我受し時沙此發句「天長くち至とかむるや秋
此月といつるに「深し志をんの蔵君文露と綴した里この
子右風中に生く稍至志の端我異く苦して是はく君
作れ後代までも人耳我車轅は世に傳ふ室芽膽に遊ぶ此
句を語とり此業東行して又二句我為す「いけ覚れ嵯峨
此鰈食に頼る「語君は みよし膽の雲或は蔵に作れるは我なるべし や夏士の
雪ふけり沙為言我語とりと有り此三章我存して餘



芳山題咏多多皆
不能入
此妙境

葉を燒と嘆息するに堪あり「うとがふ今夕の雨屋漏枯宇
「涼しけの竪まりなれや夜半孤を又霏すべし　高山麋塒が
所持君掛物に「借錢の淵は埋まぬ事かな貞室少年にハ尤に
成じ理るなり何なる打笛にか有けんいと興何里と其角の
記に載らり寛文十一年二月六十四歳にして死せり江麓に
て「松蔭や月は三五夜中納云と生狂丈貞室がむかし我慕
鹿峰山の月尤んと思ひ立しるす慈籍の紀行に出たり
室子あ里元次といふ幼にして英邁君才何り「七夕や後里
多ほく玉北橋と此句十三歳の時君作な里と玉海集にし
尤元たり里

北村季吟　附　湖春

北村季吟は江州北村の人はじめ医を以て業とし庭房といへ
里後に平安玉津嶋の廟祝となる源俳諧を学ぶの初め貞室
我沙とし中年より貞籍君愛を受く拾穂軒と号せし貞室を
離るゝ時の名な里といふ素情吱強記にして　國学に長ぎり後
進その所我主とする者大率此叟を別とし源氏をのがたり
にし　湖月抄を著し　桜梨にし　去暦抄を述に是か
大和物がたり里徒然を佐等に至る後で往解す源氏の出五十
餘種にはよべ里となんければ雲学徒はるかな　將軍
家の法強に達して葬東人召れ奇学所に補せられ食祿五百
石我湯にる諫にし名譽此事なるべしや俳風いまだ古轍をば
税をばといへども又一種の種韻なり「一僕とぞくくなりく
慈尤かな「後筋我より里てしや第ふ糸橋「ぬ扇を喩ばあハ君
肉侍哉「ほどくと在すがぬし魂祭「夏士北山沙を とも左記

氣色なる宗明が作を續で増山の井戸撰に俳客みな色々
依る宝永二年八十八歳年壽を終ふ
息瀬喜とも云ふ奇学所に召ふ花果院と号に後生畏るべし
此子の風格風ひ所籍に依ふ「堞軽」に云ふ若掲ふ云ふ門哉
「名の附ぬ所加ひ山樓」「日法氣の附ぬ松阿里揚鑑籠」「天地
の時とぞゆる時取ふ元祿十年父に先ざつて死に五十有
餘年をしむべし

秋蔵徳元

秋蔵氏は濃州岐阜の人もと織田秀信に仕ふ秀信石田に
嘗し被するに及ぐ已も亦長良河を渡て遁家剃髪して
徳元と改名し帆亭と号に初免和奇戦指南して江戸伝樂
御に住せり一年上京して貞つに入る即ち面談興行なり「京
岡舎むとばの蓋若幾めぐり貞籍「育ぐらむを祇れうどひす徳元
「堞の葬達戦沙通に督ふらん来に略下又獨吟千句を賀く名を
人に知らず寛永中重粒狗子集を撰する所時秀逸なりと
豊臣に入し句「妻と門やに住ん国出さ紀つの松遂に一世の作
者と稱さらず「大和とも唐とも言いたゞ弱雪の所里「何と見えくも
雪ぞ云紀掲ハなし善す所初心抄なり江都にて俳出を棒
するハ是戦始とに若別に拾く死す辞世「今後でハ生多ハるを
月夜ふ是大空經の文に據れり曰く幻化如夢如影如氷月と妙
京にふ

石田未得　附　未隊

石田又左つハ江戸の人故智町に住きり何なる所にや去く和
州に隠る幾程もなく再ぎ江戸へ来里髪を下しく名を未得

と改め徳元雲札と交りと京して室粗名徳と称み遂に貞つ
にのこく乾雲と号ほ「菓子やりふ香そむるちゝの表」起し並
て藤ら是ぬ伽にすみ雲ゝ為ゝ尚時句作の評に雲札ハ上より云
掛けト嵩ハ口拓子にかゝる里立甫ハ此附を為ゝし此人ハ家の
字を名成くゝ我括子に屋流と語向ハ區區なれども雲清
稽ハ皆缺ぬとなし寛文九年七月八十有餘にして死ほ
男未豚父の業を継ぐ艮嵩と号ほ「河高此時夏の字や屋形
亦清と粗奇をも能しくつ人多ゝ里しとりに天和二年三月
此世我去流

高嶋雲札　附　山夕

高嶋雲札ハ婆娑山田の產和奇我牡丹蕊きん人に学び俳諧をバ
貞寂に得ける菱花此来年江戸へ来て鬢漸を為ゝし雲傷ら
俳諧を我しゆ雲性もと朴朝にして世子に疎し故に称紀
友とち流云して為業より俳諧此ゝと猶里など申し
けるとぞ四十二の表よ免る「守り西へ今年ハ屋くし十二
神或人探歯が家士ハ絵此贄我気ゝるに名を元しや此
家ゝ家士を雪ゝつし又「呉蕊のゝほどめで反掲ハ遂
「香のなかゝが我臭かゝん雪此蕊時に尚く云掛の妙手と名
立しも宜なる流ゝ一年瘧を病ゝるに旬ら療ずれども
功我奏せぬ数日引出居夏里しゝ雲に好る屋なれバ長日
を消す流為にとて獨吟此百韻志ゝ日に雲殺句「卯の蕊
落るハ風のれこ里ゝ「いざ黒燈にせん枯穹と此附句祈禱
すや成とりゝ雲瘧ハいつしゝ落にけり或ハ紀連中百韻
一篭持来里臨をんる我粗むす速来して巻ほ廿日バゝ里

過ぎく又同巻哉出し已れ名也のるすなりしいまだ笑りぼ
侵蝕しが維持行しや交に見えば面倒ながら今一度遊して
あべこいふいらくしをなく再び点して何とく奴埜日蓮中
打揃ひ夜巻を持条し扨はじめ此巻本第に浪ぎれ入
此巻引合きし所後の巻こハ點多く善なり何まつの才宜
加添べしやと呂ふ札模手哉抃ち俳諧ハ日く上達する揚ぞ
我も纔此百にすゝ免里後巻哉用いら是よ作者がて随分
出情あれと答ふ浪も浪と即贊なり
門人山夕江戸に住しく俳業哉を川延宝より享保此間江
代にして縁より「蕉いくへ通鑑綱目上壁山」いなづ浪や誰が目
ゆらおく雲にみる初代山夕「栗むしや富世蜑此屋衣二代山夕
「人をいざ鉄寄ついく塀の梅三代山夕

池田正式

池田正式は和州郡山の藩士なり俳諧ハ貞風にして頗る雅
情あり里世に吟えたる句「獨も影ぞよ蕉此衣がへ生身種此
勤ゆえん浪りせに花を見るるすなりぼと慷慨して「そばに
居く見ぬや芽蹄のたゞに此先と選ひ古寺の吟に達し便
蕉見て浪為迷と眼と浪ける直に古壁にゆ此随意に蕉回り
して手ざろ此枝を折里隠宅しこ古寺人捧げ奉る大に悦む
遊ひて一筆の歌哉下げる「何し垣ゆよし壁百ぢりく家居して
間づ此蕉にこはる屋しこハ織て風流の斜里なるぼや或
重粉毛吹草哉撰す此人者「屋訓は表のはじめ此試筆なるこ
いへるを巻頭におすべしこ絶したましも何しか愛しく
浪蕉の喜頭といへる者の句に稽より式されを憤里来宝と

いふ出我著して雲作の何屋まり我無じとり粒僧人吹て大
り怒り直に果し怖を附さり武邑に驚起粒が色をなぐけめ
徒く屋みける時人その柔弱なるを識取者多り里し中にも
主持てる年此猥里に為ける我称美を流も有しこそ又狂奇
をさけ多り旬らの奇合計百萬なり作名して平顕寒林布安
国造二人と世里今江都に流行する狂奇者流復古の狂名も邑
等をもや様と為ならん

荒木加友

荒木兼房醫術を以て江戸友智町にすみ先里一年上原て
貞門にあり俳名我加友といふ寛文中此人なり生句おほく
見ぬ今人口にし殊里とするハ「上我下えいとう山の茶見ゆ家を此
年壽を志らぬ」同時宋鈔に同名の俳士あり喜陽邦
鈔友とつゝ見句萬里一が弟子なり

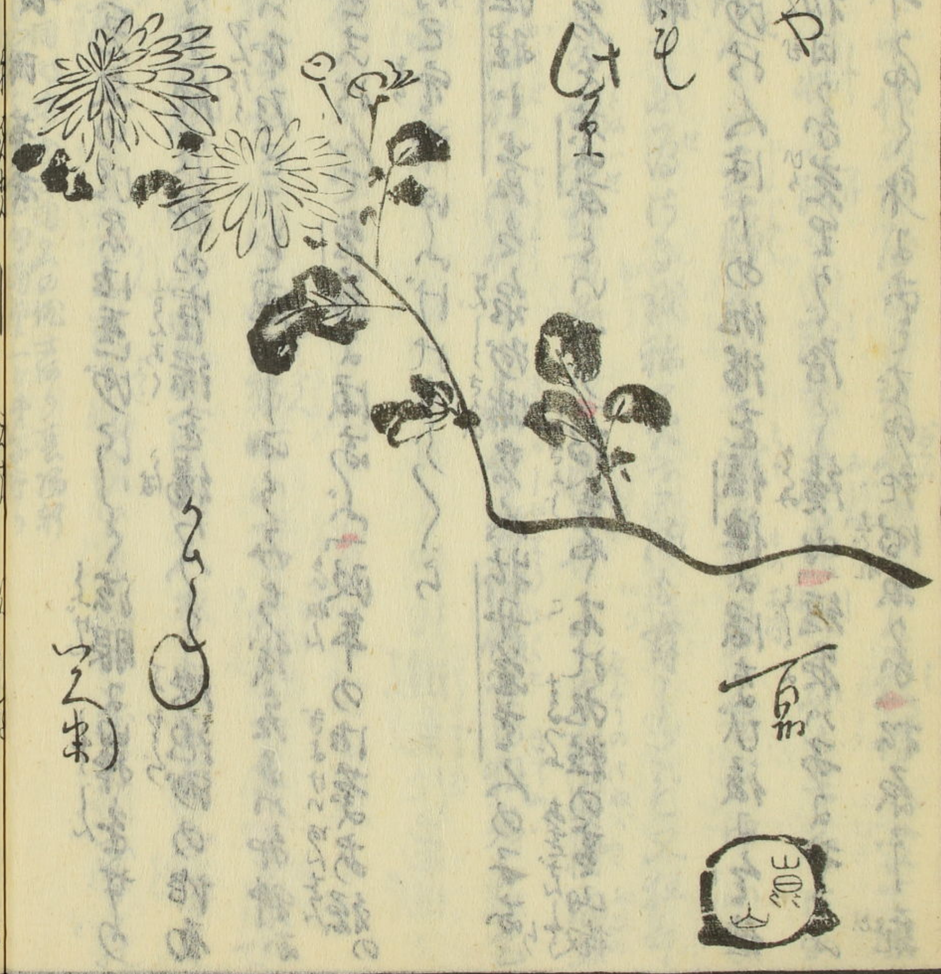
江戸鈔子に八外料がのぞ之ゆ作る

宋井卜養　附　菱友

宋井卜養子を寛文の頃其法医沙にして法眼に昇進せり
和学に通じ狂奇を能ひ初め宣流を縁りて鉄泡沙の地面
拝領其時「卜養ハ本屋ヨリモ思ひしにうみち我名るハ卯科ゆ
るべし又俳諧をさけんで貞籍に成ぶ「改年の法菱あ猿の
天下ゆゑ「喜さけ己雲やゆふげ此うゝくら
宋井氏菱籍温胜卜養其泉州堺其人牡丹茶を人の子なり
さいかいを嗜ぐ名を菱友といへり「鶏倉や木此丸粒の青山椒

芽賀一晶

芽賀一晶ハ京沙此人はじめ俳諧を伝徳に成ひ後に今徳
此門下に属す「初日ゆゑ光里うゞ屋く鏡山「短衣ハ子に甚しい
母の量收ゆゑ「耳ゆゑ所に志もだゆ起時取ゆゑ「松原にし乗



勝ちいけし　雪花蕎晩年を徳が崑山の市城傳ひりく江戸へ来里冥霊堂と号す室永四年四月六十有餘巣にして死せり

中嶋貞宜　附　二禁

中嶋貞宜は蝶々子と号は又蒼床軒紅禁軒とも称せり初め季吟に両家んで後は貞箱に倚る菊治中江戸縦治橋外に住きり「同此本や秋津すどちのこ里此年「頭雲足祢つゝ包むや雪の屋或時吟叟花評へ「きけ箕此季吟は原子り蝶の鼓として増里ひ日に「尺る色流相庭前の松と吟叟花照せり其しるもの里し　享保の比本は菊坂に蝶々子とて前句の点者なり起くは此人を慕ひしなるべし　雪子二禁まと俳諧を好む一年元日に「死ぬ迄は生る筈なり子くのはる上の五文字巣因にて亜がこき字を原を形句里にし云

感ずるハ手柄なりとて其後撰集に入たり

神野忠知

神野忠知ハ江戸の人俗称長三郎承応の頃松井坂春清が俳諧
城夜なぶ一元日や何を諭んと妙なる手一何んつらぬに古手の藍
と云又一白炭や焼かぬ昔の雪の枝と云秀縁より白炭の忠知と
嘆美せられ其角が雑談集にいはく白炭ハ忠知が家
集やあるハなし我身の貧法少と辞世して後切腹何して浮世
されば云ふやうにあはれなりとぞ

西山宗因

西山次郎作豊一ハ素肥後国加藤家の臣なり家譜に江府天満の人と有るは非なり初め
連歌を昌琢に学んで宗匠守武の風流を慕ふ天性奇才
有りて進むるに所に絶えず寛永中主家没落するの後
まく正を去り寓す俳道に心を寄せ大に風を感破して一流を
始祖と成り雅号をして宗因と改名し紅の如野に偶捿して後
難波の天満に卜居して梅翁と称せり西山忠吾と号して
其向栄といふ此翁重頼と交り深く鬼貫が筆記に見えたり
に梅翁重頼を評するに貞徳とふ流の後里村家にて
連歌を学ぶ梅翁つき同しくて和合し法来するよりおのやすく来れる
よりそれの鬼貫同じ重頼を延宝の比江戸にて松意が紫俳諧談林
俳諧初心目に於て悉此風の下向にありてを述べ江戸十百韻を興行
して俳諧弘むる宗匠に梅翁一たまいは家に談林北本にあり梅の花
咲きし奥の別岩本の諸主風虎露沾二公此句に感ひて上手の咲
あり藤々の流派流すくべく弘まりしとかや或日市村竹之丞か芝
居見物に行かれしに初て此翁を対面せらる
時しもつくへ何果が句案ずるにて漢字を去りてよれ又

清岡相撲大和

時鳥かくまでしたれは外しのゝの
せめてこゝは切寫（数をこめられよ）恒根卯の花
風ふるしき鶯麦一種を我宿に
雲鳥ゝもてハ廻文乃状
取出ハ火打付竹筆の月
鍋すゝけつゝ鳥々無の秋
ふとゝ乃種て色あり無へ蒙
遠藤を歩行て寄ちのゝ
歌寄り彼寄し廻向の鐘
さうなふ後へき浦の鳥
祭礼を設ち更里乃友ゝ鳥
黒量（キリヤウ）のそろふく鶯の
うつり雲の二十二双袖風
れろせ乃足も也雲乱坏
村鳥の雲定所き宿の足毛
鳴るそしハ志りし嘴（アワカヒ）の聲
花乃墻耳にあらつて吹簾
風の口の雪とけぬ山
先（名）イロハ布目の蔭よりれて

泥（テイ）絵のちらさゝ風になびく
岡牲をいさあてもん無木の松
うん涙（ルヒ）流して琵琶（ジヨ）ほひ
後世彩ひ雑もかく私ある今れ
大河ゝ私海に　石橋
礼欄（ランカイ）や柵（シカラミ）　石来せきかゝる
舞火燒て風呂乃桶
着札を四十八ヶ所おきより
孫陰乃国入鉢（ヤリ）持ハ釈迦
洪海の夜をたるの雲のこゝ
さゝる眼ゝ南れとゝ乃行る
獅（リ）よるまゝ下九年ゝるゝさる中
膿血（ハミチ）よりゝまに海とけ乃涙
小松原恨乃文を廻して書
世ゝ銀箔（バク）乃色かゝる也
相云に成る花の雪ちりて
本尸ゝ聲あり谷の鶯

俳家奇人談　巻之上　十

辞書十九句
長六
梅翁

附る也く然てけれハ外ものゝ
せめてハ切なる垣根卯の花
風なる尾花萬表一雅を我宿よ
雲よあてむしてハ廻文乃状
我也乃火打并竹筆の月
鍬すそけつるう人言の秋
也と言て乃穂て見あ無へ愛よ
遠路を歩行て旁ちのある
詠歌乃伎なし廻向の薄
さうなふ旅つさ浦の橋

うん痰流して数珠はさはらひ
浮世離れ雑とかく徒あるへけれ
大河千ハ和漢よ　石橋
礼欄や柵　みをせきから
篝火　焚て五風呂の猫
岩れを見十八ヶ所打重る
添泥乃国入鑓おの紋加
汝戯の夜を吉野の書きう江
さとる眼千肉おさ見付
猿よる下九まへの苔くさる律

条礼を縫ちり文つき乃あま
蓑笠のそうふく鬘月
やつの書付十二刄袖凪
むろせ乃足本乃女乱爪
村田が空之助き花の見尾
鳴るちハ走つと吾れ蛇
花の帝耳よあらて中へ余
潤のロれ香まけ富山
名人イロハ布目の衣よ破れて
泥頭のちゝさ夕風よなひく
肉帷をいさ鉢しきん無本松

朧血よう守まよ埋て乃忘も
小枕京眼乃又を庵く鳳
照らす銀箔乃見かすみ
独言よ名の毛の雲ちりて
本戸の声あう谷鶯
付の星の北武句
もやくちハ喜ある
中く高流肖光く
俳諧…
五湖…

土町詞堂…

字哉垂りぬ梅籬に窺ひけるにおやゝくと冠すべしと教
ける後に蕉籬此るを弟子に示て是奇才哉称嘆あ里
しなり凡そ一代の名句といふは「山霧や豊分子なる垂
而許ふを此什古今に奈しと評せり又「秋雲の浩茫は古
き云り家「世の中や堞くと海来彩も阿れ「稜切たやいか
ほ尾里紙幟「有明の津ぞ残る松鶴此句をとり卓絶清と
長辨なり余捕ずるに史記君注了滑稽は俳諧の如しと
云さゝろは戯云哉いふて人を悦ばせ世の人に加なふ意
なり是さ此翁君俳諧お祈づかふ此場に暇里と注ければ
古今に俳諧の上手といふは雖波の家因と伴賀の桃青なら
らでハなしと云傳ふ天和二年我朝の客舎に歿す行年七
十有八

井原西窪

井原西窪は梅籬のつゝ下にして大坂淡林君一人なり一日経
吉の社頭に於て獨吟二巻三千句を吐く是より二巻歩又
二巻籬とも称せらる流松壽軒と号ほ「我意のまゝ渡もほ
ぞ初霞「平樽や手なく生るゝ茲見酒「長持に表かくれ
ゆく衣かく「鯛は茲も見ぬ里を阿里今日の月「大晦日定な
祝世の寛うな此人まゝ西学哉以て嘗る是文章人意明
かにおるとなり是著す所小夜嵐一代男等の草紙後世にし
行ける近代戯作者の逸なる流逸書つゝ此門にいゝ行ると
いひ傳ふ元祿中に死ほ五十餘歳

椎本才麿　附　蓮水

椎本氏字は少文浩連の人喬徳籬と称すはじめ西武がつ

にしく刈武といへる里西崔が弟子なりし時は西丸おとこ西麿
こゝも梅籬の麦を更てより才麿と改なり「思ひおくれ梅ぶつ
かし紀柳ゝ家「梅が香に更ゆく笛や清曹子「れおとゞに咲
て覚里し葵ゝ家「冬木立いかゝ冬しや山の唯住居いつれ君
年ゝ有けん江戸へ来里「身は隠家に山を買なりといへる
附句しなり里時の俳家沾湖ゝ是をかゝ此我雖ぎりと咲て思へ
沾湖は此居君大家強るに買山は有るの知けるは江戸君俳諧
忍るゝに無らぬと是年の蓄て又「夏士は我買こく亜なり
こし此蓄沾湖伴人咲て「鬼や角の年ぞ行かしや蓄の夏士
としてこゝ過我改ゝ里とかやいこ種諸といふ居し後有
居めえ文中八十二歳にして死きり
北條園ゝ才麿がつ子にして名眼居士と号に生涯清貧を
示んぶゝ院籍の探を守城「ゐくと山茶君落る僧侍「清
幸にも編笠ぬがぬ桑山子ゝ家「八鶴や町に行鑓の是と行づて
宝永八年に死に辞世「れぞろく引居く徒の月清し

田中常矩　附　君長

田中常矩は京都君人吉秋と号に本斤桐良源のつなり「一説
季吟の子ともいふ往年変風して一流を立川時に是地に於く浅林をこ
ちふる者は大抵此人の派にしいづるといふ一年五百顔巻頭に
「蛇くゝ秋が帽の鐘や蓋は蓄と詠じて地こゝ秋岩雄と称きる
又「姫瓜に三千の林檎都色なし
父常長にて風波なり立甫門にして松風彩と号に「釈の杖よ
ハ里し果や椒麻木盛をいふ岩雄は此人の甥なり是才なる
我憐み甚く子とせりこ

国代松云　附　西友

国代松云ハ江戸ノ人延宝中ハ江戸ニ住シテ友人西友ト名ヲ合セ談林ノ新風ヲ興行ス一字ノ変化一句ノ餘情ヲ専ラ勤ム一芸ニ名ヲ得ル人ヲ笠付ト云若者ハ江戸ニ多ク老人ハ上方ニ多シ昔ヨリ笠付ヤ前句付ト云ヒ伝ヘシハ談林俳諧ノ事ナリ

西友ハ俳諧ノ人数ニ入ラズ国重ノ門人ニシテ江戸ニ来リ松云ニ力ヲ添合セシヨリ共ニ世ニ聞エシ人ナリ

蒼谷宗政

蒼谷宗政ハ京洛ノ人何ノ頃ヨリ江戸ニ来リ住スルヤヲ知ラズ延宝ノ末ヨリ江戸ニ来リ松云ニ従ヒ俳諧ヲ学ビ初メハ宗政ト称シ一つ屋ト云家ヲ称シ一つ屋宗政ト改メシハ後ノ事ナリ

池西言水

池西言水ハ京都ノ産ニシテ北條風雲ニ従ヒ俳諧ヲ学ビ初メハ栄徳ト称シ後ニ言水ト改ム幼ヨリ才智アリ風雲ノ門人ニテ俳諧ヲ学ビ初メシ頃ハ未タ若年ナレドモ武陽ノ熱田ト称シ句ヲ発句ニテ句ヲ熱田ノ如ク盛ンニ行ハレシヲ以テ熱田ト名ヅケシト云ヘリ後ニ古風ト改メ俳士ト争陽ヲ競ヒシモ遂ニ記名ヲ子代ノ松ニ譲リ江戸ヲ去リ京ニ帰リ住セリ

言水ハ風雲ノ門人ニテ俳諧ヲ学ビ初メシ頃ハ未タ若年ナレドモ武陽ノ熱田ト称シ句ヲ発句ニテ句ヲ熱田ノ如ク盛ンニ行ハレシヲ以テ熱田ト名ヅケシト云ヘリ後ニ古風ト改メ俳士ト争陽ヲ競ヒシモ遂ニ記名ヲ子代ノ松ニ譲リ江戸ヲ去リ京ニ帰リ住セリ

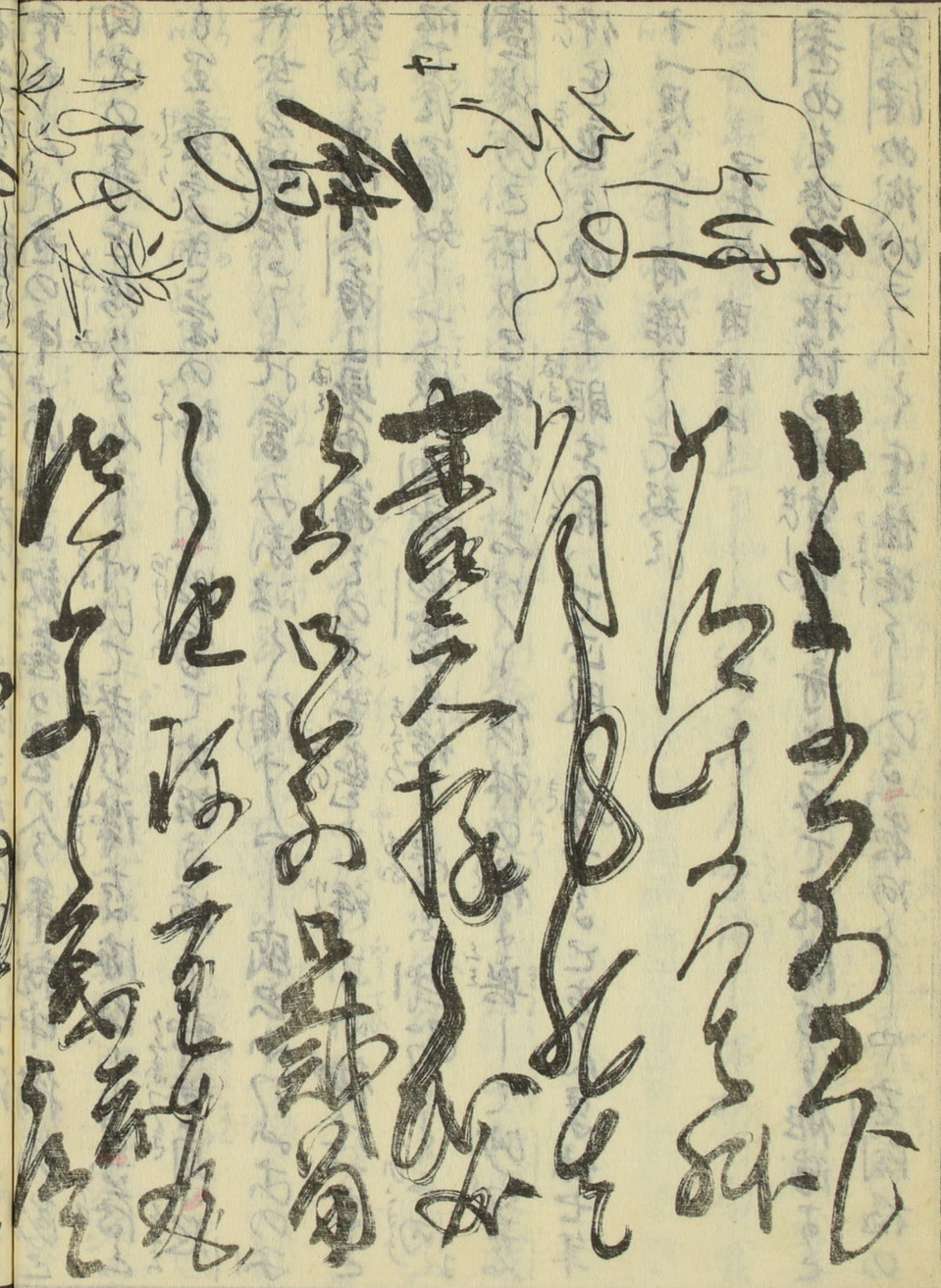
和禁火此彩や人にて凄れ強代を変態不一大手可知後江戸人
来て江戸新芳を著し祖なく洛く詠曲集我撰ふ享
保七年九月七十有三にして終るつ人今後し木枯の句我
ゆく墓碑に詠すといふ

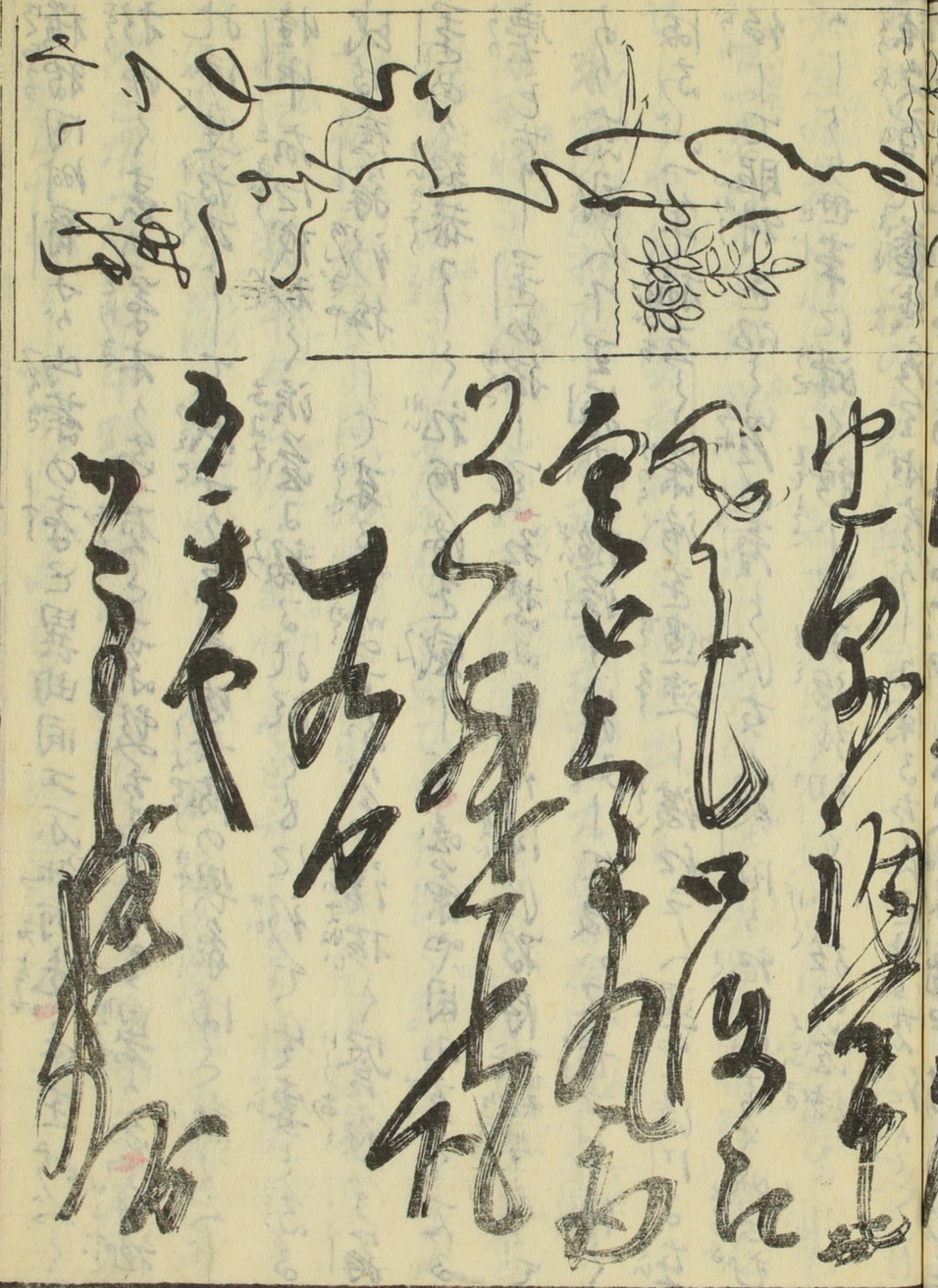
俳義伝徳

俳義伝徳神名宗尚桐林園と号ひ京洛に居して和及我
黒等と日夜相会して俳る我修するより化るなしといふ
或日東武蕉庵より文出を贈て上記の風体いかんと問ふ
杉苔友人牧禁と飲で酒数斗に及ぶ興に乗じ一句を作て
ゆく答ふ雨此月やつちげくけり此つばこと是即妙知ぬ是
「義士に添て三月七日八日ゆ家古今題芙蓉作無出此篇右者可
称絶詠「名月や今夜ゆ後るゝ子ともはふん晋子いはくいけよひの
雲や人此世の中といへる歟急ゆ是ハ今年就中揚先鄙と
白氏の年を然ゆるんも叶ひて老の誅なる流是しと蒔ふ
も里乗言き苔の林ゆ家一照蒼て大招う後し神世同「恐
や女君眼鏡とし此蒼みあ江く偏すべし或出にいふ出の子
幼なる時貞籍に見ゆ籍その才を惑し許すに徳此一字を
江て江籍歿して後ハ西武桜盛に従て学ぶ武死して一向に
盛我沙とせりと中年志べく信林の徒に與して沙父恐
体を変ぜ晩年眼を異いて正風に帰するとなん享保七年
十一月六十有餘にして歿ぬ

蓬め　附　睦中

「蓬めを楽沙松坂の人生質和奇を好て風流なり俳諧すと
美津め我沙こしく雲徒墳にへる「我ゆふしや古閣様の





撥鶏同時晋子が山茶の事と異曲同工不知何先手を拈ぐ
折ゆく妻の菓木かな「頁と子に数ちぶらるゝ暑かな」宵程
此伴連為見して紙子かな是皆女流の興象にて称すべし
惟中存に我おくく浪花に移る此ともに行て是妻と為る
或時蕉窓行拂して来ると呼すなりち請招く答慰す窓
「きめが殺恭しく礼阿流を感じて」「此菓や同に立くゝ居る
塵を与へし」「きめ招して」「孔禁に此我流に野身 旁仙下略 交死して
より東武人下里窓了随従す窓奴して後は又晋子に依く
流なぶ一年旅立く京洛を遊逸し復江戸人遥里流門に生
経して眼科を明く農の産と云ふ女人琴風が記にいはく此女む
かしより世事に疎く神下君孔殆我切く下弦の芸緒を調べ
強文度此蓋我を水なぶりに困るなんど甚だ云ふ

友紀子を風雅のうへ此興を里ならしを紀に佛道にのぞく
天窓丸免されど高中を十筋ばかり殘を流も可笑し是
は唯一君むかし我忘る成臣し彩の如き者ゆへ禅理も悟臣
せしよや旬ら雲虎和尚に答家出まも
来出の頼拝尺中は不求高不求忘は大臣君招流達を好ず
流而悩なかな孫かなぶは一心流臣によての形低柳を縁り花は
孔為唯その縁にして是に旬をいひ旁我綴く遊中にあるにあ
豊益此に業ならば一切経も豊益の口業にてあ法臭紀は
嫌にく我平白君行は急仏と旬と旁とあり極乐人行を
よし地獄へ落るは同出さし和玉顔自己念其不覓心清
燈已燿一燈心市中黙に有明鏡全識人間清浄心「達りぬん達
か知臣紀有りて何ぶ豊に是あらぬ法此とも此ぬ

宮才氣すぐれ此のぬしと享保八年六十歳にして名越知號
と改め冠里公君母君人仕人同く十一年四月六十有三にして
死ほ辞世「秋の月喜の曝見し宮の夏の現り南無阿弥地仏
岡西氏ハ家の俳諧人はじめ金一に学ぶ一有といひ後梅籬
に從てより惟中と改む一時軒と号す「上元や松にはじ免て
喜の月「とく發く見る人隔せ山橋記こゝせ旅行裏に逢く
「帯古しいまぐ旅なる衣ぐ人壯業より醫を業にして難波に
遊ぶり又出越能して宮名頗る吟ゆ元祿五年に歿ほ

上臈鬼貫

上臈鬼貫ハ梅翁伴丹の人針料を以て浴菴に遊ぶ家貧して
資用に乏し或人その一女越權貴の妾に喪んとす越すらむ義を
守て此を固辞す宮性の嚴正なる大率都のぬし結る越或出
蕉門諸匠と悪事を作らず此又作に亡沙君法會を好ぐ家と
いへるハ大いなる流妄論なり（諸匠法百考すべし）俳諧を重粉に成るんで
鬼貫といふ元祿享保の日東山と居行して名四才に吟ゆ
或時禪宮越一問せられて「座家に出く唱ふる山藤の家是端
的機鋒何減栢樹子と話意の心を「浬けし浬けしつく寐ぬ最
怨情顯面「夏ハまゝ冬が雨しぢやと云れけり「ふよつ月里と秋の
宮なる流夏士此山此句雄渾得李青蓮風骨「夕立の又や何處に
下駄はり雲「行水の捨所なし出花声「麦の時や妹が湯を
頻りに里「拘すごやなり面白の隔ぶ天性飄蕩にして謔謔に
隔らぬ人云に韶縄するを知ぬ居し興はじめ司記していたく
已二十に滿ぶる頃先沙松江の籬と梅籬列座の會におゐるに
「ちよと見に近紀も達し吉野山といふ家句に「獨に瓢を下して

ならくと附られ執筆より吉野山に瓢その花は里やと名られ
當惑して吉野山の発句は袖とかく瓢をば浮人々にたぐらり
りそりてる古吟はりと物見いつは里とれ云ふがふ名家をはげむ
くは彼云旨法師にも劣らぬ才力感ずるに餘はり拙さを此子
業盛くる業みらの郷音を継との志し寔ふるゝなに俳家
れえ祖と係るず後一年號の絃賀にて蕉翁の行脚するに逢て
「はるく拙と知れが笑るし袖おく里晩年囃る里居士即雁とも
称せり元文三年に往床

小西来山 附 里年

小西来山はもと浪花といふ素泉堺の産也小より父母を離ひ
釈梅花尼に蒼育せられ係出家に化する後勤めず只忠後漬まいとを
好む附り里年請く忍て来山子と交りし寮題敏なるつまの嘆く
十歳煙霞齢いまだ二十にならざるに事をまなく調宗となる十萬
堂と号す中葉滄林の翻楚了して古今に名を残し達人なり
「元日やされば野川の水の音」興趣尚美「三味線も小哥も絶
らざる楼の花」精確「むしつてはむしつては捨はるれ菜園めり哉
此竹また相ま及ばざる「菜喰ふく死ともなしいざ病らぬ」清意新撥友
川やげで足ふく暇あり「涼しさは淀橋を淀川筋へ」二ツ自然
可称合作「子宿ぬれく性子ひとり川ある浦山いはく」詩間一声
徽雨将来此時是景可想「雨戸また秋の婆や灯ぼ狂ひ金の鏡
鐘」「松の枝にかけ掛りはつ」たゞ乗興自在「初聲と巴川
はるそふ秋と成りり里庸山いまで以温雅調寓悲憤思泉
為傑作「我ゆくは幾度はげく見るう寒夜ぼ天凄絃流と
女人形の記すに対すに此句はあり保国子の記にあ之此女人形は長

尺ばかり産して猶息に加ふ流今京都十萬歳ニ秘す流
といふ蓋し西寉舊徳を此多き其里といへども此叟が奇正
にして古今我綜錯す流が如相に及ぶす要するに西山の一流
此人出てより後世ニ大成きり爲ぶ産し
前川由平を桜籠の門子にして東山が沙なり暁年親に入て
自入と改動雲作多く尺ば恰や三日此月はく今日の海山姓
が至らぬ山や雲は畢室永中津の西山姓に及ば

俳家奇人談畫之上終